

ブロードウェイ・ミュージカル

日本上演の軌跡 山口貞三

昨昭和48年は日本に初めて本場のブロードウェイ・ミュージカルが上演されてから丁度10目に当り、日本のミュージカル史上記憶するに足る年であった。

即ち昭和38年9月、東宝劇場に於て、当時ミュージカル最高の傑作といわれ、又最多続演記録を有していた「マイ・フェア・レディ」が東宝製作によって翻訳上演され、観客13万人を動員する好結果を収めた。

これに力を得た東宝は、次々とアメリカ或はイギリスのミュージカルを上演し、又40年に「ハロー・ドーリー」、43年に「オリバー」の一座を迎え（これより先、39年に日生劇場が「ウェストサイド物語」の一行を招いた）、帝劇ミュージカルに続く東宝ミュージカルの一環としてこの新しい演劇のジャンルを根付かせようと試み、本年1月の「ジュ

ガー」に至るまで翻訳上演は17本を数える。その殆どを昨年4月亡くなった菊田一夫が担当した。

然し「キス・ミー・ケイト」（41年）の如く聊か輸入の選択を誤った感のある作品、「プロミセス・プロミセス」（46年）の如く配役に疑問ある公演、或は「努力しないで出世する方法」の如く崩しすぎの場面が目立つて意義の薄れた舞台等があり、その道は必ずしも平坦なものではなかった。

勿論、これらの個々の欠点よりも、全体を通じてのミュージカル演技力の不足、出演者の層の薄さ、それにもまして観る側が容易に形式に馴染まないこと、の方が遙かに重要な問題であろう。

そのような困難な条件下、前記の「マイ・フェア・レディ」を始め「王様と私」（40年）

「ラ・マンチャの男」（44年）「スイート・チャリテイ」（47年）など見る可き成果を挙げた舞台も少くなかった。そして昨年7・8・10月にそれぞれ「王様と私」「マイ・フェア・レディ」「ラ・マンチャの男」、三作品の再演を続けさまに行ったが、これは東宝がアメリカ演劇界の榮譽とされるトニー賞特別賞を贈られたことによるもので、日本のミュージカル界は否応なく、ブロードウェイ・ミュージカルの影響を再確認乃至再検討することを迫られたのである。

上述の通り、現在までブロードウェイ・ミュージカルの上演は東宝製作が圧倒的で、他には僅かに劇団四季とゼネラル・アーツの共同企画製作で「アプローズ」（47年）ほか本年予定されている2作品を含めて5本、その前に同系列の日生劇場製作で「結婚物語II アイ・ドウ・アイ・ドウ」（44年）を、宝塚歌劇団が「オクラホマ」（42年）「ウェスト・サイド物語」（43年）「回転木馬」（44年）を、後は一つずつで、東俳の「野郎どもと女達」（40年）松竹・アスカプロの「ヘアー」、アトリエ41による「ファンタスティックス」（46年）宮城まり子による「イルマ・ラ・ドウス」等を数えるにすぎぬ。

中で、劇団四季は過去10年、日本生命の後援により小学生を招待して行っている日生子供ミュージカルでの実績を持ち、劇団として音楽・ダンスの基礎訓練を重視してきた。然し本場ミュージカルは踊りの場面が話題を呼んだ「アプローズ」、「メイム」(48年)共越路吹雪中心の企画・公演であったが、昨年ロック・ミュージカル「イエス・キリスト・スター・スター」を上演し、又「メイム」の上演中越路が負傷し、代役に立って好演した雪村いづみを劇団員がバックアップして、舞台を維持したことは、この劇団のミュージカル指向の巾を挙げたと言える。その意味で雪村をマリアに据えた今年の「ウェストサイド物語」が正に勝負どころであろう。

次に宮城まり子の製作・主演による珍らしいフランス原産の「イルマ・ラ・ドウス」の日本での上演の意義は、演出の中村睦夫が狭い、それも極めて特殊な条件を持つ場所(渋谷・ジャン・ジャン)で上演するため、全面的にアレンジしたことであって、出演者・楽団編成を小人数に絞り、大変に洒落れた、観客と一体化した小劇場ミュージカルに仕立て直したことであった。

音楽と台本が楽しい、いわゆるよく出来た

ブロードウェイ・ミュージカルは数多くあるから、日本の観客動員可能数、更には今後の経済的事情を考えれば、この種の試みはもつと行われてよい。加えてこのような舞台にあっては装飾的なものが極力取られるから演技(勿論歌・踊を含めての)演奏が非常にシビアに問われ、試練と向上の場となる。

その意味でアトリエ・41製作の「フアンタスティックス」はもともとがオフ・ブロードウェイの百数十人の客席を持つ小劇場で上演されてきたミュージカルで、1960年以来、今日に至るまで14年間、ニューヨークの新聞広告欄にその名を見ることが出来る。日本で最初に上演したのは昭和42年、芸術座で東宝製作による。この時初めて、ブロードウェイの制度に倣って一般のオーディションを行って若い2人の主役を選ぶ等した。アトリエ・41に製作が移ったのは46年からで、場所は前記ジャン・ジャンであった。そして「フアンタスティックス」はこの小劇場に移してから、本来の輝きを示し始め、ほぼ同じスタ

ッフ、配役で場所を変え乍ら、短期の公演を重ね、見る者にミュージカルの楽しさを味わせている。

宝塚歌劇団は前記の3作品の他、実は38年

よりも前に白井鉄造が宝塚式に改めて、ヨーロッパ系オペレッタの色濃い初期のブロードウェイ・ミュージカルを二度上演している。その「インディアン・ラヴコール」(31年)は「ローズ・マリー」であり、「恋人よ我に帰れ」(33年)は「ニュー・ムーン」であった、共に主題歌の一つを新たな標題にしたものである。然しこれらを以て、ブロードウェイ・ミュージカルの本格的上演の最先駆者というには問題があらう。

紙数が尽きたので後は補足的に述べると、俳優座が37年に又多少変形ではあったが青年座が昨年、「三文オペラ」を上演した。尤も「三文オペラ」自体、ブロードウェイ・ミュージカルと言えるかどうかは疑問だ。いま一つ星野演出事務所によるオフもののカントリー・ロック・ミュージカル「タッチ」(47年)の各地上演もあげておこう。そして東京だけに限っても再演、再々演されたケースが多々あることを附記したい。

(文中敬称略)